

「国を水没から守りたい」 ジョイントベンチャーが マーシャル諸島共和国で発足



マーシャル諸島はその形状と美しさから「真珠の首飾り」と呼ばれる

「内容は理解した。すぐにでもやろう」

6月22日、マーシャル諸島共和国政府の応接室の一室。同国のリトクワ・トメイン大統領がそう言い切った。

快諾したのは、株式会社フェニックの北嶋静男社長から提案があった、ジョイントベンチャーについてだ。

同社は20年前から燃料改質装置、「フェニックアルファ」を製造・販売している企業。同製品を自家用車やバス、トラック、漁船・大型船舶などに搭載すると、燃費が向上し、排ガス中のCO₂（酸化炭素）、有害物質を低減する。

気象や走行条件で効果は変わるが、トラックで約10から15%、重油を使用する船舶で約3%、5%の燃費を改善する。現在、乗用車とトラックで約7万8000台、漁船を含む船舶で約1350隻に導入されている。開発は久留米工業大学の副学長で工学博士

の渡邊孝司氏との産学連携による。同社は2013年に上場する予定がある。

燃費コストを抑えて環境対策「フェニックアルファ」

同社がマーシャル諸島共和国と推進するジョイントベンチャーとは、現地法人を設立し、同製品の組み立て工場を敷設するプロジェクトだ。

「マーシャル諸島は太平洋上に浮かぶ美しい島国。しかし、近年は地球温暖化の影響により、水位が上昇。ある観測ではあと30年で国が水没してしまう。一企業として微力ながら、地球環境問題に 대응していきたい」（北嶋社長）

政府が土地や建物を現物出資する。製品は近隣諸国や台湾、アメリカ、カナダなどにも輸出する。

「マーシャル諸島は漁業や観光業が盛んで工業製品の輸出は行っていない。雇用の面でも支援になる。できるだけのことをしていきたい」と、北嶋社長は話す。



「フェニックアルファ」。内航船舶は購入費の3分の1を国から補助されている